

小学校国語科の学習指導における「対話のサイクル」の有効性

—物語教材を用いた読むことの指導を中心に—

教育内容・方法開発専攻
文化表現系教育コース
言語系教育分野（国語）
M11163B
大濱 さ お り

1. 研究の目的

本研究の目的は、小学校国語科の読むことの学習指導における「対話のサイクル」の有効性について明らかにすることである。

対話を基盤とした学びの必要性については、これまでも多くの研究者が指摘している。本研究においては、対話を基盤とした学びを国語科の学習指導においてどのように構築していくかについて考察していく。中でも「読むこと」の学習において、対話をどのように行うことが、子どもたちの学びを豊かなものにするのかに焦点を当てて考察を行う。

まず、先行研究の考察により、〈テキストとの対話〉〈自己との対話〉〈他者との対話〉の三つの対話に〈自己との再対話〉を加えることの必要性を明らかにした。そして、読むことの学習指導において、四つの対話による「対話のサイクル」を繰り返すことを提案した。四つの「対話のサイクル」を繰り返すことにより、学習者の読みの深化・拡充を促すことができるのかどうかについて、論者自身が行った、四つの「対話のサイクル」を意識して展開した実践授業の考察を通して確認した。

2. 論文の構成

本論文は、次の四章により構成されている。

第1章 「対話のサイクル」に関する基礎理論

第2章 四つの対話による「対話のサイクル」を取り入れた読むことの学習指導

第3章 「対話のサイクル」による読みの変容に関する考察

第4章 研究の成果と今後の課題

3. 論文の概要

第1章においては、先行研究によって指摘されている対話の意義や国語科の学習指導における対話の必要性を明らかにし、本研究の基礎となる理論について考察した。その考察を基に、読むことの学習指導における「対話のサイクル」の有効性を検証するための仮説を提示した。

〔仮説〕 小学校国語科の読むことの学習において、四つの対話によって構成された「対話のサイクル」を繰り返すことにより、学習者の読みの深化・拡充を促すことができるのではないか。

第2章においては、四つの「対話のサイクル」を意識した実践授業において「対話」がどのように機能したかについて考察を行った。

①「対話のサイクル」を取り入れた単元の構成

〈テキストとの対話〉〈自己との対話〉〈他者との対話〉〈自己との再対話〉による「対話のサイクル」を学習過程の中に繰り返し位置づけた。〈他者との対話〉においては、ペア、グループ、学級全体による伝え合いなど、多様な形態の伝え合いを行った。

②「対話のサイクル」を取り入れた授業の実際

学習過程に位置づけた「対話のサイクル」が、実践授業においてどのように機能したかを考察

した。学習者は、〈テキストとの対話〉〈自己との対話〉において自己の読みを生み出す。そして、〈他者との対話〉において出会った他者の読みを受け入れる。さらに〈自己との再対話〉において、学習者の中に葛藤や読みの吟味が起こり、自己の読みを再構築していく。このように「対話のサイクル」を繰り返すことにより、学習者が自己の読みをしっかりと構築していくことを確認することができた。

③学びの振り返り

「学びの振り返り」においても、「対話のサイクル」を取り入れた学習活動を行った。学習者は、「自己の読みの変容」「身につけた力」「対話の重要性」などのメタ認知を行っていることが確認できた。

第3章においては、「対話のサイクル」を取り入れた実践授業における学習者の読みの変容に関して、次の4点において考察を行った。

- ①読みの変容が顕著に見られた事例
- ②伝え合いシートにおける学習者の変容
- ③お話し紹介カードにおける学習者の変容
- ④〈自己との再対話〉における学習者の変容

これらの考察により「対話のサイクル」を取り入れた実践授業において、次のような三つのパターンの学習者の変容が見られた。

- ・根拠を明らかにした上で他者の読みを受け入れ自己の読みを再構築している
- ・最初、他者の読みは自分と違うという立場を取りながらも、他者の読み自ら根拠を補うことにより、他者の読みを受け入れ、自己の読みを再構築している
- ・他者の読みから引き出された読みをもとに、自己の読みを再構築している

学習者が自分とは違った読みを持つ他者と出会ったとき、読みの変容がより顕著に見られることが明らかになった。自分とは違った読みと

は、自分にはない視点から登場人物を捉えたり、自分が着目していなかった叙述を根拠に生み出したりした読みのことである。〈他者との対話〉により、自分とは違う読みを持つ他者と出会った学習者は、〈テキストとの対話〉〈自己との対話〉により生み出した自己の読みを再確認したり、吟味したりする。当然、他者の読みとの違いに葛藤することもある。その葛藤の中で、自己の読みと他者の読みを止揚していくことにより、自己の読みを再構築する。この過程において、学習者の読みが深化・拡充していくのである。

第4章においては、実践授業の考察を整理し、読むことの学習指導における「対話のサイクル」の有効性について確認した。

最初は、単純に他者の読みを受け入れるだけだった学習者が、「対話のサイクル」を繰り返すことにより、他者の読みを受け入れることに理由づけをしたり、他者の読みが本文の叙述のどこを根拠としているのかを考えるようになる。根拠を明らかにした上で他者の読みを受け入れ、自己の読みを吟味したり再構築したりする。このように対話の質が向上し、そのことにより、学習者の読みが深化・拡充していくことを確認することができた。

【今後の課題】

今後の課題として、次の3点を挙げた。

- ①「対話のサイクル」を生かした学習材の開発、学習過程、授業構想の確立
- ②「対話のサイクル」を位置づけた年間計画の作成
- ③物語以外の教材を用いた「読むこと」、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習指導における「対話のサイクル」の有効性の考察

主任指導教員 堀江 祐爾
指導教員 堀江 祐爾